「無肥料・無農薬・冬季湛水・不耕起栽培」

むかしの田んぼ・カグヤ米

「むかしの田んぼ」　種蒔き、そして田植え

5月初旬、快晴の元「むかしの田んぼ」で無事に田植えを行うことが出来ました。「むかしの田んぼ」での田植えは今回で2回目となります。そして、田植えから遡ること約二ヶ月前。

田植えの準備として、種蒔きを行いました。お世話になっている藤﨑農場の藤﨑さんは「種まきが始まると、今年も始まったと感じます。田植えまでは休みなしです」と仰います。田植えまでのこの間、毎日気温を注意深く観察し、成長し過ぎたり、逆に成長が滞ったりしないよう見守られ、ついに田植えの時期を迎えました。

苗箱のセッティングなどは人の手を必要としますが、
種蒔きは機械が自動で行ってくれます。

苗箱に蒔く種籾（たねもみ）

水分を含んだ苗箱は１枚３、４キロにもなります。これをフォークリフトでビニールハウスへ運び並べます。

苗箱に土が入り、種籾が均等に落とされ、
水が掛けられさらに土を被せる行程

	一般的なお米作りの流れ	藤崎農場でのお米作りの流れ
1月		●種籾の塩水選
2月下旬～3月		●種まき、苗づくり
4月	●苗づくり	●種まきの後 25 日経ったら、育苗ハウスを全開し、 自然の状態で 5.5 葉の成苗（大人の苗）に育てます。
5月	●田起こし	●田植え
6月	●田植え	●草取り・水の管理
7～8月	●草取り・水の管理	●草取り・水の管理
9月～10月	●稲刈り、乾燥・脱穀、 籾摺り(もみすり)	●稲刈り、乾燥・脱穀、 籾摺り(もみすり)
稲刈り後	●代掻き	●冬季湛水（通年湛水） 田んぼに糠を撒いて水をはります。

正月早々、種もみの塩水選を行い２月下旬には種まきです。
藤崎農場は１ケ月も早く種を播きます。
田んぼにはオタマジャクシがいっぱい、田植えが始まります
（半不耕起では田植え前に田んぼの表面だけ軽くかき混ぜます）。

一般の農法では稚苗（2.5 葉の子どもの苗）を使います。
育苗期間は慣行農法では 25 日前後のところ、
不耕起栽培では倍の約 60 日と長くなりますが、
丈夫な大人の苗を植える事により、
害虫や病気に強い稲になります。

苗の育つ環境が肝心！

稲はすくすく育ちます。雑草も頑張って伸びます。除草剤は使わないので、昔のように人力で除草します。
田んぼの中はカエル、メダカ、タニシ、ザリガニ、クモ、水生昆虫がいっぱいです。空にはトンボ、ツバメ、サギが飛んでいます。

７月末から８月初めにかけて、一斉に穂を出し花が咲き受粉し、登熟期に入ります。

刈り取りの終わった田んぼに米ぬかを撒き、水を張ります。
米ぬかは生きものの食べ物になります。田んぼは冬期湛水、
氷の張った水中にも生きものの活動がみられます。
冬の静かな田んぼは、鴨がよく遊びに来ます。時々白鳥も飛来します。２月から３月にかけてニホンアカガエルが産卵のため、水を求めて田んぼに集まります。

冬も生き物がいっぱい！

「生き物いっぱい耕さない田んぼ」藤﨑農場

藤﨑農場は千葉県の香取市にあります。利根川が流れ、対岸は茨城県稲敷市、田んぼの一部は神崎町にまたがっています。

藤﨑農場では、不耕起栽培」でお米を育てています。

「不耕起栽培」とは、日本不耕起栽培普及会の岩澤信夫氏が提唱した自然農法で、田んぼを耕さないから「不耕起栽培」と言います。

耕さない主な理由は、土の反転をしないことで、土中に酵素を送らず、雑草の発芽を抑えることです。また、田んぼに一年中水を張った「沼」状態にすることも、「不耕起栽培」の特徴です。

藤﨑農場さんとの出会い

カグヤで「発酵」について深め、学び始めた２０１２年。千葉県神崎市で自然酒を作る寺田本家さんの酒蔵を尋ねました。その際に、寺田本家２４代目当主、寺田優さんから「寺田本家のお酒は、藤﨑さんのお米を使っているんですよ」とご紹介頂きました。

それから毎年、田植えや草刈り、稲刈りとお手伝いに伺っていました。２０１８年からは、藤﨑農場さんの田んぼの一部をお借りし、「むかしの田んぼ」と名付け、カグヤ米を藤﨑農場さんのご協力の元、育てはじめました。

「むかしの田んぼ」とは

秋の収穫＿はざかけ

「むかしの田んぼ」は、古来から大切にしてきた日本人の精神を尊びお米づくりを行っています。
それは八百万の神々にあるようにいのちを大切にするため、農薬は一切使わず、田んぼの生態系の働きを活かすようにしています。

冬の間は、水を張ることによって渡り鳥を中心とした冬鳥たちが飛来してきて、田んぼで冬を越していきます。その御蔭で雑草の種も攪拌（かくはん）され草取りの作業もあまり必要になりません。

大量の田螺（たにし）が毎年生まれては、お米を守り雑草たちの新芽を食べてくれます。
まさに、自然の働きを上手に活かして自然の恩恵によって育てるお米。
それを私たちは「むかしの田んぼ」と名付けた理由です。

田の神：稲作の豊凶を見守る農耕神（写真：カグヤ福岡農園の田の神様）

春の稲作開始時期になると家や里へ下って、田の神となり、秋には山へ帰る。
田仕事に携わる農民の作業を見守る、田の神信仰は日本全国各地で伝承され、
これを、田の神・山の神の「春秋去来」と言うそうです。

田の神像には地蔵像、仏像、神像、農民型など様々あり、最も多いのは農民型の田の神像で、
頭にわらの編み物を被り、右手にしゃもじを持って踊る姿の田の神様像だそうです。

「むかしの田んぼ」では、日本古来から
続いている伝統の年中行事を大切にしています。

●田の神祭り

祈年祭：五穀が無事に成熟を祈るお祀り

別名：春祭（としごいのまつり）：※とし=稲

御田植祭：農耕儀礼の最も重要な儀礼

早乙女：田植えの日に苗を植える女性のこと。ハレの役であり、神に奉仕する神役でもある。

新嘗祭：豊作を感謝するお祀り

地域によっては、新嘗祭までは新米を食べない地域も未だに存在しているそうです。

新嘗祭：田んぼの一角を刈り、かまどで炊いたご飯を味わいました。

通常の農家さんでは、子どもの苗（稚苗）を植えるそうですが、藤﨑農場さんではそれよりも大きく育てた苗（成苗）を植えます。大人の苗になるまでにはあえて冬の厳しい気候のもとで育てることで、病気や自然災害に強くたくましい稲が育つのだそうです。そんな藤﨑さんと郷さんの深い見守りによって育っているのは稲だけではなく、オタマジャクシやミミズ、タニシなどの生き物も共生しており、まさに「見守る田んぼ」です。

また。無農薬・無肥料で育てているため通常の稲よりも小ぶりですが、いのちの力はとても充実して、美味しいむかしの御米ができます。日本の農業は厳しい自然にあっても豊かなものであったはずです。それはかつての「日本の原風景」の中に遺っているように、みんなが笑い稲を一緒に育てていく中で豊かな時間を過ごしたから今日まで続いてきたのです。

農薬を一切使わず、タニシやカエル、ドジョウに水鳥、そんな生き物たちの力を借りつつ、稲自身の力で育った自然米。この一粒一粒が未来への懸け橋となることを信じています。

私たちが田んぼに携わるのは、お米を育てたいのではなく日本人の

生き方や智慧を子どもたちに伝承しようと取り組んでいるからです。

●田んぼに関連する取り組み

菖蒲湯（しょうぶゆ）

藤﨑農場さんの田んぼ近くに自生している菖蒲を頂きお風呂に入れています

「菖蒲湯」の由来は、田の神を迎えるための「禊」の名残りとも言われているようです。
かつては「田植え」の中心となる女性が家にこもり、身を清める「五月忌み（さつきいみ）」という風習があり、この日には、家の軒に菖蒲をさし、早乙女（さおとめ）と呼ばれる女性たちが菖蒲で作られた鉢巻を巻いて、菖蒲湯に入り、身を清めたといいます。

菖蒲湯の効用は、病気にならない、勝負事に勝つ、蛇にかまれないなどと言われており、
昔から、厄除け、魔除けなどの不思議な力があると信じられていたそうです。

実際に、菖蒲湯が体に良いというのは科学的な根拠もあり、菖蒲湯は体を温め、
腰痛など体の痛みにも効くとされていますが、こんな由来があったとは、驚きです！

日本の行事を深めていくと、そもそもの「稲作文化」なしでは語れないことに気づかされ、
私たち日本人のルーツとなっている「米」を、もっともっと大事に守っていきたいと、
改めて感じました。

カグヤＨＰ 2014/05/06 自然から学ぶブログより

水口祭りの室礼

毎月変わる社内の室礼

「水口祭り」の室礼：瑞々しい稲穂を育てる田の神を祭る行事。
「苗がよく根付き、今年も豊作でありますように」と、早乙女たちが水を
はった田に入って苗を植え、田の神に祈る習わし（予祝）があったようです。

水口祭りの水口とは、苗代に稲の種をまいた日に苗代田の水口（用水路の入り口）や
畦で祭りが行われていたことによるものだそうです。

つくね芋：「稲の根がしっかり根付きますように」との言葉の盛り物です。
お酒：田の神に供える大事な一品として、麻を結んでいます。
手ぬぐい：田植えをする「早乙女（さおとめ）」に見立てています。
カタクチイワシを干した田作り：昔、田畑の肥料としていたためこのように呼ばれ、
別名「ごまめ」とも言います。肥料にしたところ、
お米が五万俵も取れたので「五万米（ごまめ）」と書く
ようにもなったそうで、五穀豊穣を願う縁起物です。

カグヤＨＰ　2017/06/06　自然から学ぶブログより

長野県　さくら保育園実践発表

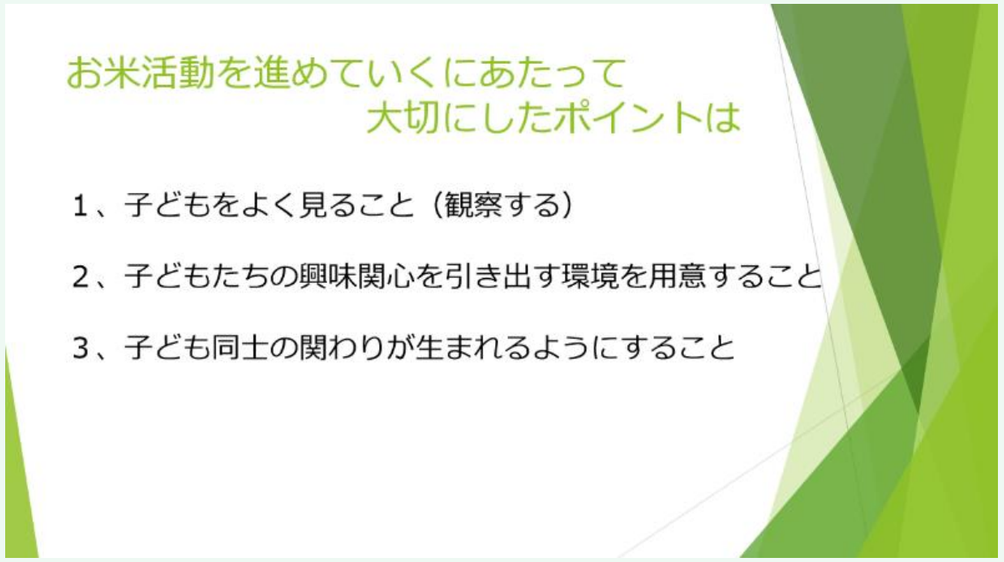
保育環境研究所ギビングツリー主催

第 38 回保育環境セミナーで実践発表された内容の一部をご紹介します。

園内研究として取り組まれたお米作り。

お米作りを通した「見守る保育」の

実践発表をして頂きました。



さくら保育園実行委員会より、食べ物・

植物のことに精通しているということで、

クイズ王の免許が発行されていました。

郷土料理の五平餅をクッキングで作られ、

作り方のプロセスや子どもたちのやり取り

を可視化されていました。

農家のお兄さんをお呼びし、

お米作りの色々について、

子どもたちに話してもらってい

るそうです。地元の人との

繋がりも子どもたちは体験！

東京都　せいがの森こども園

―「見守る」ビオトープ

せいがの森こども園の園庭には、雨水、太陽光、風力、田んぼを利用したビオトープがあります。
こちらのビオトープが完成したのは 2002 年。

18 年近く園児たちと一緒にビオトープの営みを楽しまれています。
季節によって生き物いっぱい､そして小さな田んぼでのお米の収穫も楽しみにされているそうです。

園にビオトープを作る際に藤﨑農場さんの田んぼを訪ね、田んぼの生態系を見学されたそうです。
藤﨑農場さんの田んぼはビオトープとしての魅力も兼ね備えているようです。

藤﨑農場の田んぼの特徴

慣行農法では冬場は田んぼの水をぬいています。藤﨑農場田んぼでは、水をはる事により、
いろいろな生き物がいっぱいになります。

殺虫剤を使わないこの田んぼは、稲にとって悪い虫もいますが、それを食べるクモも沢山います。
耕さない田んぼは、生き物いっぱいの自然に近い環境です。自然と一緒に稲を育て、お米を作る、
これが耕さない田んぼです。

春：少し早く種蒔きをして、寒さと時間をかけて強い苗を作ります。成苗（大人の苗）に近くなるまで育苗ハウスで育て、おたまじゃくしの泳ぐ田んぼに田植えをします。

夏：カエル、めだか、どじょう、タニシ、ザリガニなどいっぱいです。稲はすくすく育ち、花が咲き、稲穂が風にそよぎます。雑草もたくさん出るので草取りが大変です。

秋：収穫の秋。田んぼの水を抜き、コンバインで稲刈りです。稲刈りをしていると、ツバメが空を舞い、虫を捕らえ、鷺がカエルやイナゴを食べています。

冬：田んぼに水があるので鴨や白鳥が飛んで来ます。水の中は小さな生き物がいます。春近くになるとアカガエルが産卵し、おたまじゃくしも泳ぎ出します。

≪　せいがの森保育園はビオトープ　≫

ミニ田んぼビオガーデン

東京都の西、多摩ニュータウンの　せいがの森保育園。保育園の敷地に降った雨は　雨水として園舎内のさまざまな雨水タンクに集められ、利用されています。雨水利用のひとつに『ミニ田んぼビオガーデン』があります。園庭に水路を作り　貯留した雨水を流します。水路沿いにさまざまな　植物や昆虫、とかげなどが現れました。ミニ田んぼでは　メダカ　が元気に繁殖し、タニシ、げんごろう、やご、ひる等さまざまな生き物が観察出来ました。稲はぐんぐん成長し、8月中旬穂をつけ　9月後半には収穫です。

雨水を水路に放流雨水は水路を流れ、ミニ田んぼへ

ミニ田んぼでは　6月の上旬に田植えを行いました

茨城県岩井の自然耕（不耕）の田んぼから　メダカが転校してきました。稲は緑を増し　水草も育ちます。

7月にはいると稲はぐんぐん成長します。
メダカの産卵がはじまり　2ミリくらいの子メダカも　たくさん観察出来ました。
水草　サヤミドロ　などの植物　めだか　たにし他にも小さい生き物が観察できます。命がいっぱい湧きだしてきました。

8月中旬に穂を出しました。様々な大きさのメダカが　元気いっぱい泳いでいます。もうすぐ収穫です。水草とサヤミドロで水面は見えないほどです。

※　メダカ:::絶滅危惧種、メダカは「田んぼの魚」という意味があります。

※　サヤミドロ::　自然耕の田んぼだけに発生する藻。水を浄化し酸素を供給しプランクトンを生む。

ビオトープが完成した年の資料が、「見守る保育」公式ＨＰに掲載されています。
資料の続きをご覧になりたい方は、「見守る保育」公式ＨＰをご参照ください。

たからもの

お米ができるまでには、沢山の時間、労力、愛情が込められていることを感じました。

「たからもの」という言葉は、「田から生まれるもの」だと聞いたことがありますが、
まさに、お米は「たからもの」だと実感します。

そして、そんな「たからもの」は、決して「作物」という財、経済だけでなく、
人と人との絆や、人と自然との絆、知恵や技術や誇り、文化や歴史など･･･
とても多くのものがあてはまることを、今回のお米づくりからも、確かに感じます。

古来より農耕民族として田畑と共に生きた日本人は、高価で手に入りにくいものではなく、
ごく日常の暮らしや、毎日の働く場所にあるものを「たからもの」と捉えていたのでしょう。

そう思うと、子どもたちが、草花や虫、石など･･･身近なものを「たからもの」にしているのも、
同じ感覚なのかもしれません。

古来の日本人や子どもたちに習い、「働くこと」についても、疲弊する消耗活動ではなく、
「たからもの」へと繋がる生産活動と心得ていきたいです。

カグヤクルーブログ　2014/09/07　自然から学ぶブログより

田植え

計量の選別

草刈り

光選別によって、
ヤケ米や
カメムシ被害の
お米を除去

稲刈り

計量

籾摺り

袋詰め

caguya
〒161-0023
東京都新宿区西新宿 3-2-11　新宿三井ビルディング２号館 10 階
Tel:03-5909-7155
毎週月曜日に配信しています。
ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ　奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン

メールマガジンのご登録は、
ＱＲコードからお願いします。